

平成二十九年入学選抜学力検査問題

国語

(配点)

4	3	2	1
33点	33点	20点	14点

(注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから十四ページまでです。  
検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 解答用紙に氏名と受検番号を記入し、受検番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。  
受検番号が「0(ゼロ)」から始まる場合は、0(ゼロ)を塗りつぶすこと。
- 4 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 5 解答には、必ず**H Bの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、またはマーク部分が「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおり塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがあります。「マーク部分塗りつぶしの見本」は、解答用紙に記載してあります。
- 6 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。
- 7 一つの解答欄に対して、複数のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはなりません。
- 8 解答は、解答用紙の指定された解答欄のマーク部分を塗りつぶすこと。指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしても有効な解答にはなりません。

1

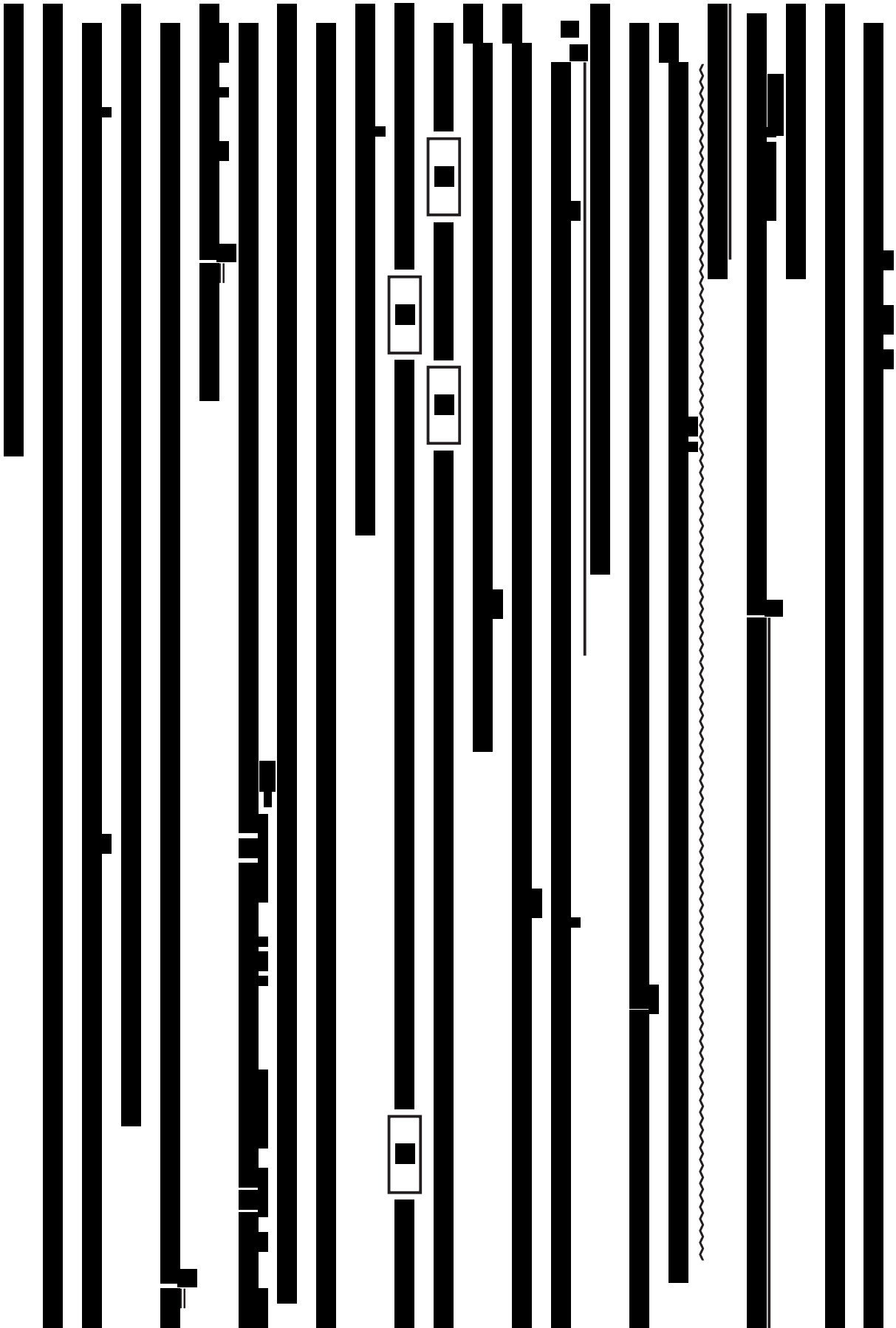
次の(1)から(7)までの傍線部の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでのの中から一つずつ選べ。

- |     |                           |   |   |   |   |   |   |   |   |
|-----|---------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | 責任者の地位に <u>ツク</u> 。       | ア | 点 | イ | 付 | ウ | 着 | エ | 就 |
| (2) | 紅葉が美しく湖面に <u>ハ</u> える。    | ア | 生 | イ | 反 | ウ | 映 | エ | 派 |
| (3) | 友人の機嫌を <u>ソコ</u> ねる。      | ア | 破 | イ | 撃 | ウ | 損 | エ | 壊 |
| (4) | お寺の境 <u>ダイ</u> を掃除する。     | ア | 内 | イ | 台 | ウ | 第 | エ | 代 |
| (5) | 事態を収 <u>シユウ</u> して落ちつかせる。 | ア | 集 | イ | 修 | ウ | 拾 | エ | 習 |
| (6) | 過去の類 <u>ジ</u> した例を探す。     | ア | 似 | イ | 示 | ウ | 次 | エ | 事 |
| (7) | 朝食の支 <u>タク</u> がとこのう。     | ア | 卓 | イ | 度 | ウ | 宅 | エ | 託 |

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

[Redacted text block]



（注1） 長明かも鴨長明。平安時代末期から鎌倉時代初期の歌人・随筆家。

（注2） 和漢混淆文かかなで書かれた和文体に、漢語や漢文訓読体などを交えた文体。

（注3） 慶滋保胤い平安時代の漢詩人。『池亭記』はその著書。

問1 本文中に、たいした慧眼だといえるでしょう。<sup>(1)</sup>とあるが、どのような点に対して「慧眼」(ものごとの本質を見抜く眼力)だと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 貴金属の方が家よりも財産としての価値が高いということに、八百年も前の段階で長明がいち早く着眼しながら『方丈記』を書いている点。

イ 日本人が昔から当然のこととしている財産としての家という見方に対し、八百年も前に長明が疑問を持ちながら『方丈記』を書いている点。

ウ 家を財産とする日本人の価値観が八百年を経過してもずっと変わらないのを見越し、長明がそれを確信しながら『方丈記』を書いている点。

エ 日本人の財産についての考え方が八百年後には変化することを予見し、長明が家の新しい価値を探し求めながら『方丈記』を書いている点。

問2 本文中に、先行する和漢の名文から表現を借りて、それを下敷きに彼独特の味付けを加えて流麗な美文をつづっています。<sup>(2)</sup>とあるが、これに続く波線部ではどこに「彼独特の味付け」があると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 『池亭記』を下敷きにする際に、漢字カタカナ交じりで書かれていた文を、漢字ひらがな交じりに改めることで読みやすくしているところ。

イ 『池亭記』を下敷きにする際に、「露」を宿す枯れ野の風景を描写することによって、和歌的世界の趣が感じられるようにしているところ。

ウ 『池亭記』を下敷きにしつつも、「行人」を「旅人」、「旅宿」を「一夜の宿り」というように分かりやすい言葉に置き換えているところ。

エ 『池亭記』を下敷きにしつつも、「露」や「末葉の宿り」という表現を加えることによって、『方丈記』の冒頭部と関連させているところ。

問3 『方丈記』本文中に、知らず、生まれ死ぬる人、いづかたよりきたりて、いづかたへか去る。<sup>(3)</sup>とあるが、ここに用いられている修辞技巧を、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 体言止め

イ 擬人法

ウ 倒置法

エ 直喩法

問4 空欄 A から D には、「露」または「朝顔」が入るが、その組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア A 露 B 朝顔 C 朝顔 D 露  
イ A 朝顔 B 露 C 朝顔 D 露  
ウ A 露 B 朝顔 C 露 D 朝顔  
エ A 朝顔 B 露 C 露 D 朝顔

問5 本文中の(a)から(d)の「に」のうち、**他と異なるもの**を、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア もとに<sup>(a)</sup>しています。  
イ 野<sup>(b)</sup>に<sup>(c)</sup>一夜の仮の宿りを結びます。  
ウ それはまた同時に<sup>(d)</sup>、  
エ 静かに<sup>(d)</sup>旅立つための、

問6 この文章全体を通して、長明にとつての住まいとはどのようなものであつたと筆者は述べているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 長明にとつて住まいとは、自分の身体の延長として過不足のない大きさで、必要なものを収納するカプセルのようなものであつた。  
イ 長明にとつて住まいとは、自分を守り英気を養ってくれるものであると同時に、来世へと心静かに旅立つ準備をする場でもあつた。  
ウ 長明にとつて住まいとは、この世での最後を過ごす場として、極楽へと向かう人生のしまじたくに専念するためのものであつた。  
エ 長明にとつて住まいとは、経済的豊かさを示すためだけのものではなく、悔いが残らないように人生を終えるための場でもあつた。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

自然環境を経済学的に考察しようとするときに、まず留意しなければならないのは、自然環境に対して、人間が歴史的にどのようなかたちで関わりをもってきたかについてである。この問題は、広く、文化をどのようにとらえるかに関わるものであつて、狭義の意味における経済学の枠組みのなかに埋没されてしまつてはならない。

「文化」というとき、伝統的社会における文化の意味と、近代的社会において用いられる意味との間に本質的な差違が存在することをまず明確にしておきたい。

(注1) 一八五四年、アメリカ・インディアンの酋長シヤトルがいったといわれる<sup>(1)</sup>つぎの言葉は象徴的である。

「白人がわれわれの生き方を理解できないのはすでに周知のことである。白人にとつて、一つの土地は、<sup>(2)</sup>他の土地と同じような意味を持つ存在でし

かない。白人は夜忍び込んで、土地から、自分が必要とするものを何でもとってしまうよそのもの余所者にすぎないからである。白人にとっては、大地は兄弟ではなく、敵である。一つの土地を征服しては、また次の土地に向かつてゆく。……白人は、自らの母親でも、大地でも、自らの兄弟でも、また空までも、羊や宝石と同じように、売ったり、買ったり、台なしにしてしまったりすることのできる『もの』としか考えていない。白人は、貪欲どん欲に、大地を食いつくし、あとには荒涼たる砂漠、だけしか残らない。」

この問題について、一九九四年七月、ナイロビで開催された IPCC (気象変動に関する政府間の協議機関) で発表されたアン・ハイデンライヒとドヴィッド・ホールマンの論文には含蓄深い考察が展開されている。

ハイデンライヒ・ホールマンは、文化について、<sup>(3)</sup>二つの異なった考え方が存在することを指摘する。

マサイ族の若者が「文化」というときには、同年代の若者たちのことを想起し、伝統的な制度のもとで、社会がどのように組織され、自然資源がどのように利用されているかに思いをいたす。

A、北ヨーロッパの人々が「文化」というときには必ず、芸術、文学、音楽、劇場を意味している。環境の問題を考えるとき、宗教が中心的な役割を果たす。宗教は、自然を創り出し、自然を支配する超人的な力の存在を信じ、聖なるものをうやまうことだからである。

自然環境が文化、宗教とどのような形で関わっているかによって社会全体が規定されているといってもよい。また、ある一つの社会において、自然とみなされているものが、他の社会では、「文化」と考えられる。またケニアやタンザニアのマサイ族には、宗教に対応する言葉は存在しなかった。宗教は自然そのものと同一視されていたからである。伝統的社会においては、「文化」は、自然、宗教、文化を総体としてとらえたものになっている。

自然と人間との間の相関関係が具体的なかたちで表現されるのは、自然資源の利用という面においてである。伝統的社会では、人やものの移動がきわめて限定されているため、生活を営む場所で利用可能な自然資源に頼らざるをえない。したがって、これらの自然資源の潤渇こからはただちに、伝統的社

会の存続自体を危うくする危険を内在している。伝統的社会的文化は、地域の自然環境の(注2)エコロジカルな諸条件にかんじて、くわしい深い知識をもち、(注3)エコ・システムが持続的に維持できるように、その自然資源の利用にかんする社会的規範をつくり出してきた。

自然資源の利用にかんじて、長い、歴史的な経験を通じて知識が形成され、世代からつぎの世代に継承されていった。自然環境にかんする知識と、その世代間を通ずる伝達によって、文化が形成されると同時に、文化によって新しい知識が創造されてゆく。何世代も通じて知識が伝達されてゆくプロセスで、社会的制度がつくり出される。B、日常的ないし慣行的な生き方が、社会的制度として確立し、一つの文化を形成することになる。

自然と人間との間の相関関係がどのような形で制度化されるかによって、人間と人間との間の社会的関係もまた規定されることになる。どのような自然資源を、どのようなルールにしたがって利用すべきかが文化の中心的な要素となる。したがって、<sup>(4)</sup>年長者の教示ないしは指示に重点が置かれ、自

然資源の利用は、社会のすべての構成員に対して公正に、また利用可能となるような配慮が、どの伝統的社会についても充分払われている。

伝統的社会では、自然環境にかんする知識は、スピリチュアリティとの関連において形成されている。C、シヤーマニズムは、三千万人を

超えるアメリカ・インディアンが信じていた宗教であったが、それは、自然資源を管理し、規制するためのメカニズムであつて、その持続的利用を実現するための文化的伝統であつた。

(5) 人間の移動が自由になるとともに、文化、宗教、環境の乖離は拡大されていった。とくに、ヨーロッパ諸国によって、アフリカが植民地化されるプロセスを通じて、資源の搾取がより広範な地域でおこなわれるようになり、伝統社会のもつ、それぞれの限定された地域に特定化された知識は無視され、否定されていった。アフリカ以外の大陸でも事情は同じであつた。伝統的な自然環境と密接な関わりをもつ知識は、経済発展の名のもとに否定され、抑圧されていった。

ハイデンライヒ・ホールマン論文で、近代キリスト教の教義が、自然の神聖を汚し、伝統的社会における自然と人間との乖離をますます大きなものにしていった経緯がくわしく論ぜられていることは興味深い。

キリスト教の教義が、自然に対する人間の優位にかんする論理的根拠を提供し、人間の意志による自然環境の破壊、搾取に対してサンクシオンを与えた。と同時に、自然の摂理を研究して巧みに利用するための科学の発展もまた、キリスト教の教義によつて容認され、推進されていった。<sup>(注7)</sup>

ルネサンスは人間の復興であつたが、それは自然の凋落を意味している。近代思想の発展はさらに、人間の優位を確立し自然の従属性に拍車をかける。<sup>(注8)</sup> フランシス・ベーコンにとつては、すべての創造物は人間との関係においてのみ意味をもち、自然は天からの賜物であつて、物理学と化学を中心

とした科学の発展を通じて、そのゆたかな収穫を搾取されるものにすぎない。ルネ・デカルトはさらに極端なかたちで議論を進めていった。デカルト

の機械論的、決定論的世界観にもとづけば、自然は、数学的な法則にしたがつて機械的に動く存在であり、自らの意志をもたず、受動的な存在にすぎない。自然の価値は、人間にどれだけ効用をもたらすかによつてはじめてはかることができるとされていた。自然を抑圧し、搾取することに対してなんら制約条件はもうけられないべきではない。

(6) 自然の手段化は、アダム・スミスの経済学によつて、その極限の段階に入つていった。そこでは、自然だけでなく、人間自身もまた、経済的利益の追求の前にその尊厳性を失つて、すべてが生産手段として、経済活動の手段を果たすものとなつていったのである。

科学が、宗教、文化とまったく独立なものとして展開され、経済学が普遍的な思想を形成するとともに、産業革命の可能性が現実のものとなつていった。化石燃料の大量消費によつて惹き起こされつつある地球温暖化の現象は、まさに産業革命の必然的帰結に他ならない。

(宇沢弘文『社会的共通資本』による)



(注1) アメリカ・インディアン⇨南北アメリカ大陸に住む先住民。

(注2) エコロジカル⇨自然や環境と調和すること。

(注3) エコ・システム⇨環境保護に配慮した仕組み。

(注4) スピリチュアリテイ⇨精神性。

(注5) シャーマニズム⇨原始宗教の一形態。

(注6) 乖離⇨結びつきが離れること。

(注7) サンクシヨン⇨承認。

(注8) フランシス・ベーコン⇨一五六一〜一六二六。イギリスの哲学者。

(注9) ルネ・デカルト⇨一五九六〜一六五〇。フランスの哲学者。

(注10) アダム・スミス⇨一七二三〜一七九〇。イギリスの経済学者。

問1 空欄 A、 B、 C に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア A⇨だが B⇨やがて C⇨つまり イ A⇨ところが B⇨それゆえに C⇨さらに

ウ A⇨いっぽう B⇨また C⇨すなわち エ A⇨しかし B⇨そして C⇨たとえば

問2 本文中に、<sup>(1)</sup> つぎの言葉は象徴的である。とあるが、酋長の言葉はどのようなことを表しているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア インディアン社会の伝統的な自然観よりも、白人社会の近代的な自然観の方が理屈に合っているということ。

イ 歴史の異なるインディアン社会と白人社会が共存するためには、相手の心を推しはかるのがよいということ。

ウ インディアン社会における文化の意味と白人社会における文化の意味には、根本的な違いがあるということ。

エ 自然環境を経済学の立場から利用するということについては、白人もインディアンも大差がないということ。

問3 本文中に、<sup>(2)</sup> 他の土地と同じような意味を持つ存在でしかない。とあるが、白人は土地をどのようなものとして見ているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア どの土地であっても、人間が必要とするものは無制限に奪い取って構わないものである。

イ どの土地も、人間が生活を営んでいく上で克服しなければならぬ手ごわいものである。

ウ どの土地であるかに関わらず、支配する広さが人間の権力を示す基準となるものである。

エ どの土地も、貨幣によって売買することにより人間に膨大な利益をもたらすものである。



問4 本文中に、二つの異なった考え方<sup>(3)</sup> とあるが、どのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 文化を、資源の利用にかんする総合的な知識とする伝統的社会の考え方と、自然を利用するための科学の力とみなす近代的社会の考え方。

イ 文化を、宗教と自然の総体として規定する伝統的社会的考え方と、科学的合理性や経済的利益の基盤としてとらえる近代的社会の考え方。

ウ 文化を、人間の営みと自然との総体としてとらえる伝統的社会的考え方と、人間の芸術的な活動に限定してとらえる近代的社会的考え方。

エ 文化を、人間関係を総合的に規定する社会規範とする伝統的社会的考え方と、自然を従属させるための技術とみなす近代的社会的考え方。

問5 本文中に、年長者の教示ないしは指示に重点が置かれ<sup>(4)</sup> とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 自然資源を同年代の構成員に平等に配分するためには、経験豊富な年長者の権威に頼らざるをえないから。

イ 自然資源の利用にかんする知識は文化として蓄積され、年長者を中心に世代を超えて伝達されてきたから。

ウ 伝統的社會での制度にかんする知識や慣行は、それに精通した年長者により正確に伝承されるべきだから。

エ 自然資源が涸渇すると伝統的社會の存続は難しくなるが、年長者には苦難を克服してきた知恵があるから。

問6 本文中に、人間の移動が自由になるとともに、文化、宗教、環境の乖離は拡大されていった<sup>(5)</sup> とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 人やものが移動することにより情報交換が活発になったため、狭い地域に限定されてきた伝統的宗教や文化が価値を失ったから。

イ 人間が広範囲に移動できるようになるにつれ、地域の自然環境を維持するための伝統的知識が無価値とされるようになったから。

ウ 人々が生まれた土地を離れて経済活動を行うようになったために、若い世代の新しい価値観だけが尊重されるようになったから。

エ 人やものが活発に移動するに当たって、自然を持続的に利用するための伝統的な宗教や文化が正しく伝えられなくなったから。

問7 本文中に、自然の手段化は、アダム・スミスの経済学によって、その極限の段階に入っていった<sup>(6)</sup> とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 人間本位の考えにもとづく経済学が普遍的思想となり、かつて神の賜物として崇拜されていた自然が破壊され、抑圧される対象になったこと。

イ 神聖とみなされていた自然が、効用をもたらすか否かによって評価され、やがて人間にとって価値のないものは排除されるようになったこと。

ウ 経済活動のために自然界の資源を無制限に利用した結果、地球温暖化の現象が深刻な問題となり、大規模な対策を迫られることになったこと。

エ 神聖だった自然が搾取の対象と考えられるようになり、さらには経済活動のために人間までもが尊厳を失って、生産手段の一つとなったこと。

問8 この文章の内容や構成に関する説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 伝統的社会と近代的社会との比較をとおして文化の変容を記述することにより、科学技術が人類にもたらした功罪について説明し、自然本来のあり方を論じている。

イ 近代の科学が自然を破壊してきた過程を先住民の酋長の言葉を手がかりに記述した後、神を汚した人間の罪を歴史に従って説明し、人類の未来について論じている。

ウ 伝統的社会における文化と自然との関係を説明した後、科学の発展と経済学の影響によって変化した、近代的社会における自然と人間のあり方について論じている。

エ 近代ヨーロッパの科学技術の発展によってもたらされた経済学の成果を説明するとともに、進行しつつある環境破壊の原因にかんして、新しい視点から論じている。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

幼い妹を亡くした三きようだいとママは、死んだパパが残した古い別荘に移り住んだ。ママは、三きようだいの長女と二人の弟にそれぞれ「オパール」「琥珀」「瑪瑙」とあだ名をつけ、羽や尻尾の飾りのついた服を着せた。そして、三人の子どもたちを外敵から守りたいという考えから、庭の壁の外へは決して出ないように命じていた。

ある日ママが、一頭のロバを連れて仕事から戻ってきた。右肩にいつものツルハシを担ぎ、ハンドバッグを肘に掛け、左手で手綱を引っ張るママの後ろから、それはぼっくり、ぼっくりとついてきた。普段と様子が違うのに気づいた子どもたちはテラスに飛び出し、「それは何？」と尋ねるのも忘れてただ驚いていた。何であれ、外の世界の生き物が壁を越え、自分たちの目の前にいるという事態を飲み込むのに時間が必要だった。その間ロバは、さして面白くもないといった風情で首を上下させていた。

「温泉療養施設のボイラーマンの小父さんが飼っているロバです。」

ママはツルハシを玄関脇の所定の位置に立て掛けたあと、ロバの背中を撫で、口元の轡をゆるめて手綱を外した。いつの間にも扱いを学んだのか、慣れた手つきだった。自由になってもロバは相変わらず、その場で足踏みをするだけで、駆け出す素振りは見せなかった。

「それ、僕らで飼うの？」

興奮を抑えきれずに琥珀が口を開いた。

「いいえ。借りてきただけです。明日から木曜日まで、家で働いてもらうんです。」

「何をするの？」

今度はオパールが尋ねた。

「庭の草を食べるのが、この子のお仕事です。ほら、ご覧なさい。お利口に早速、仕事に取り掛かっているじゃありませんか。」

ママの言うとおり、ロバはステップの脇に茂る雑草に鼻先を埋め、口をもごもごさせていた。自分が話題の中心になると気づいているのかい  
ないのか、前脚を前後に開き、心持ち後ろ脚の膝を曲げ、尻尾をだらんと下げてリラックスした雰囲気漂わせていた。

「僕(1)の尻尾より、長いね。」

ロバを驚かせないよう、用心深い口調で瑪瑙は言った。ロバに触ってみたくてたまらないのに、どうしても最後の一步が踏み出せない瑪瑙は、オパールの手を握ったまま、下から顔をそっとのぞき込んでいた。

「バケツに水をたっぷり入れて、庭の四隅に置いてあげて下さいね。泉の湧き水が涸れているといけませんから。草を食べると、とつても喉が渇くらしいのです。」

ママはボイラーマンの小父さんから、ロバについての注意事項を伝え聞いているようだった。

「さあ、私たちも晩御飯にしましょう。」

あとは全部ロバに任せておけば安心、という晴れ晴れした声で、ママは言った。

こうして毎年、一年に六日だけ、彼らの暮らしにロバが加わることになった。そのスペシヤルな訪問者ボイラーは、ただ無口に草を食むだけだったが、子どもたちに輝かしいひとときをもたらした。彼らの頭の中で一年は、ボイラー以前とボイラー以後、二種類の季節に分類された。その二つをロバの六日間がつないでいた。言ってみればロバは、リボンの結び目と一緒だった。特別な形に整えられた結び目があるからこそ、彼らの閉ざされた単調な時間は、ただの一本の紐ではなく、愛らしいリボンになるのだった。

もちろんママはたとえロバであつても、壁の中に何ものかを引き入れることに抵抗があつた。せつかく苦心して守ってきた秩序が乱されるのを恐れた。しかし郵便受けに投げ込まれた役場の環境課からの通達には、無視できない不穏な威圧感があつた。

「……最近、別荘地への不法投棄が後を絶たず……衛生面からも保安上からも、草刈を徹底していただく必要があります……高速回転式電動草刈機の貸し出しを役場で受け付けており……また、業者へ委託する場合には、町からの補助金が支給されます。申請用紙に必要事項を記入の上……改善が見られない場合、管理会社を通して注意勧告を……。」

役場、業者、管理会社。何もかも一家にとっては、遠ざけるべき不吉な響きを持つ言葉だった。できるだけ目立たない方法で雑草を始末するにはどうしたらいいか。業者を中に入れるのだけは絶対に避けなければならない。やはり頑張つて自分で草刈機を操縦すべきなのか。あるいは敢えてこのまま放置しておく方が安全だろうか。迷っている時偶然出会ったのがボイラーマンのロバだった。ボイラーマンは実家の農家で飼っているロバを時折療養施設に連れてきては、入院している喘息の子どもを背中に乗せて遊ばせていた。順番に裏の広場を一周することだったが、ちょっとしたリクリエーションとして人気があつた。求められている役割を承知しているように、ロバは一人一人パジャマ姿の子どもを乗せては、ゆつくりした一定のスピードを保つて歩き、ボイラーマンが手綱を引っ張らなくても、丁度一周したところで自ら立ち止まった。どんなに大柄な子でも、乱暴で落ち着きのない子でも嫌がらなかった。その様子を洗濯場からママは眺めていた。

「あの子も、あそこへ行く。」

木陰に一かたまりになり、歓声を上げたり飛び跳ねたり髪を引っ張り合ったりしながら順番を待っている。色とりどりのパジャマの群れの中に、あ

の子も紛れ込んでいる。今か今かとうずうずし、背伸びをして先頭の様子をうかがっている。ボイラーマンに両脇を持ち上げられ、高みに座り、日向ひなたに向かつて出発してゆく選ばれた子を、眩まぶしそうに見送る。ロバはくたびれてしまわないだろうか、こんなにもたくさんの子を乗せるのだから、とあの子は少しづつ心配になってくる。<sup>(b)</sup>心こころなしかロバの息遣いが苦しげに聞こえてくる。気管支が悪いのは子どもの方ではなくロバの方かもしれない。自分ではできるだけ腰を浮かせてロバに重たい思いをさせないようにしよう。優しいあの子は考える。あと何人。あと何人。あの子は指を折って数えている。

どんな場面であれ、子どもが大勢集まっているところに出会うと、ママは必ず死んだ娘を探した。小さな子どもたちが発する特有の騒がしさや熱気、交差するか細い脚、重なり合う影の中には、本来そこにいるべきなのに、事情があつていられない可哀かわいそうな子どものための空洞が一人分、隠されているのをママは知っていた。洗濯の手を止め、息を詰め、ママはその空洞に目を凝らした。たえず動き回る彼らの忙せわしなさに圧倒され、それはすぐどこかへ紛れてしまいそうになるので、油断がならなかった。生きている者たちは誰も、自分の傍らにそんな空洞が潜ひそんでいるとは気づいてもいなかった。なぜ彼らが一人も足を取られないのか不思議だった。<sup>(6)</sup>しかしどんな無遠慮にも乱暴にも侵かされることなく、それは静けさを保ちつつ、確かにママの視線の先にあつた。やがて全部の子どもたちに順番が巡めぐってくる。皆平等に広場を一周し、満足してロバに手を振り、自分の病室に戻ってゆく。発作を心配して病室の窓から我が子の名前を呼ぶ母親もいる。その声にはっとしてママが瞬まきをすると、さっきまで見つめていたはずの空洞がいつの間にか消えている。

あとにはただボイラーマンとロバが取り残されているばかりだった。ロバは広場の草を食べていた。いつまでもひたすら食べ続けていた。

「何て働はたらき者のロバかしら。」

濡ぬれた手をエプロンで拭ぬきながらママはボイラーマンに近寄ちかっていった。

「貸かし出しは可能可能でしょうか？」

ロバに向けて、ママは精一杯の微笑を浮かべた。

(小川洋子『琥珀のまたたき』による)

(注1) ツルハシツルハシ 鉄製の土木用具。ママは外敵から身を守るために勤め先の温泉療養所への行き来にこれを持ち歩くことにしていた。

(注2) ボイラーマンボイラーマン 給湯の施設で働く技師。 (注3) 轡あしひこ 手綱をつけるために馬の口にかませる道具。



問1 本文中の、<sup>(a)</sup>心持ち・心なしか<sup>(b)</sup>の意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つずつ選べ。

ア 気のせいか      イ 気ままに      ウ 心配そうに      エ 思い切って      オ ほんの少し      カ いつの間にか

問2 本文中に、<sup>(1)</sup>僕の尻尾より、長いね。とあるが、この言葉からは瑪瑙のどのような心情がうかがえるか。その説明として最も適当なものを、次の

アからエまでのの中から一つ選べ。

ア 本心では触るのがいやなので、わざと尻尾のことを話題にして誰か代わりにロバに触ってもらおうとしている。

イ 触ってみるまでの勇氣はないが、自分の服の飾りとは違う本物の尻尾を持った生き物に興味をそそられている。

ウ ゆったり落ち着き払っているロバの機嫌をとるため、あえて事実と異なることを言いつて気を引こうとしている。

エ 外の世界から突然やって来た見慣れぬ生き物に戸惑いつつも、よく観察し相手のことを知りたいと思っている。

問3 本文中に、<sup>(2)</sup>晴れ晴れした声<sup>(3)</sup>とあるが、これは「ママ」のどのような心情の表れか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 首尾よくロバを借りることができ、子どもたちの安全を守ることに成功した母親としての誇らしい気持ちの表れ。

イ 子どもたちがロバに興味を示す様子を見て、おとなしいロバだからすぐに仲良くなれるだろうという期待の表れ。

ウ ロバに雑草の始末を任せることで、家族でゆつくりと食事をとる時間ができたことへのほっとした気持ちの表れ。

エ 飲み水を用意しておけばあとはロバが勝手に草を食べるので、問題を解決する糸口がつかめたという喜びの表れ。

問4 本文中に、<sup>(3)</sup>言ってみればロバは、リボンの結び目と一緒だった。とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 外の世界から遠ざけられた三きょうだいに未知の情報を与える存在として、視野を広げるのに役立っていたということ。

イ 単調な生活の中で孤独に陥っていた三きょうだいの支えとなる存在として、三人の心を固く結びつけていたということ。

ウ 三きょうだいの閉ざされた暮らしにひと時の変化を与える存在として、平凡な生活を豊かなものとしていたということ。

エ 妹を亡くした三きょうだいの気持ちを明るくしてくれる愛くるしい存在として、一家から待ち望まれていたということ。

問5 本文中に、<sup>(4)</sup>郵便受けに投げ込まれた役場の環境課からの通達<sup>(5)</sup>とあるが、次の行から始まる通達文の表現についての説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 通達文の内容が断片的に受け止められていることを強調し、外部との交渉を避けようとする母の意識を表している。

イ 通達文中の言葉遣いの冷淡さを強調して、公の機関が持っている市民生活に対する配慮に欠けた一面を表している。

ウ 通達文の中に専門用語が多用されていることを強調し、母にはその内容がよく理解できなかったことを表している。

エ 通達文が長文に及んでいたことを強調して、有効な対処の方法を考える手がかりが数多くあったことを表している。

問6 本文中の、<sup>(5)</sup>木陰に「かたまり」になり、から始まる形式段落全体の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 母親の視点から、「あの子」が実際にしていることや考えていることを時間の流れに沿って描写している。

イ ロバに乗るまでの気持ちの高まりを、生きていた時の「あの子」の視点から現在形を用いて表現している。

ウ 周囲の子どもたちの様子やロバの気持ちを、「あの子」の目をおして見ているかのように描写している。

エ 目の前にいない「あの子」の心の動きを推測した母が、「あの子」と一体化したかのように表現している。

問7 本文中に、<sup>(6)</sup>しかしどんな無遠慮にも乱暴にも侵されることなく、それは静けさを保ちつつ、確かにママの視線の先にあった。とあるが、どうい

うことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 死んだ娘の幻影にとらわれたままの母には、生命力にあふれるはずの子どもたちも死に近いものとして感じられていたということ。

イ 自分の傍らに潜んでいる空洞の存在は誰もが認識できるものではなく、我が子を失った人にしか見ることができないのだということ。

ウ 子どもたちが大勢集まった時特有の活発さとは対照的な死の静けさによって、娘の不在が紛れもなく母に実感されていたということ。

エ 大勢の子どもたちが忙しく動き回る中に死んだはずの娘の姿を見いだす母にとって、娘は生きているのも同然であったということ。

問8 この文章の内容や表現の特徴を説明したものととして最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 一人一人に寄り添う視点で親子の心情を丁寧に語りながら、ロバの訪問が一家に明るさを及ぼすまでの経過を情感豊かに描くことで、家族が

取り戻していった生への希望が伝わるように書かれている。

イ ロバを迎え入れる経緯を現在から過去にさかのぼって語りながら、子どもたちに対する母の心情を繊細に描くことで、一家が置かれている特

異な状況や内面の動きが自然に伝わるように書かれている。

ウ 会話文を多用して子どもたちと母との間に通う愛情を細やかに語りながら、一家とロバの交流をユーモアを交えて描くことで、かえって心の

奥に秘めている悲しみが切なく伝わるように書かれている。

エ ロバとの交流によって心の安らぎを実感する家族の日常を淡々と語りながら、豊かにイメージを広げる比喩を交えて情景を描くことで、現実

と空想を行き来する不思議さが伝わるように書かれている。